

が騰貴したといふのはそれである。土地に使用せられた最後の資本によつて得られた穀物の分量が幾何であらうとも、それは同一の價値であらう、蓋しそれは同一分量の労働の生産物であるから。この等しい價値のより大なる比例はそれ自身より大なる價値でなければならぬ。私の價値の尺度は労働の分量である——地代は單に支拂はれた額がそれを生産する爲めに、より多くの労働を必要とする時にのみ騰貴する。肥沃な土地に於ける十人は一八〇クワタアを生産し得る——より肥沃ならざる土地に於いては單に一七〇クワタアに過ぎない——然らば若し一〇人の労働者が後者の分量の半ば又は八五クワタアを受取るならば、彼等は五人の労働が生産し得るものを受取るのである。一八〇クワタアを生産する十人は、より以上を受取らない。併しその土地に於ける六五クワタアは五人の労働よりもより少い労働で生産せられる。その通りである、併し穀物の價値は最も有利でなく且つ土地で最後に使用せられた資本によつて生産せられた分量によつて左右される。よりよい土地の保有者が有する利益は獨占の性質を有ち、従つて労働者への報酬の價値は、よりよい土地に於いて八五クワタアを生産するに必要とされる労働の分量によつてではなく、より悪い土地に於いてそれを生産するに必要とされる労働の分量によつて従つてすら、地主の分前に歸屬する全生産物の比例を増大する傾向を有する。』私は何處で私から云つたか判らない、併し私は、若し私がこの誤謬に陥つてゐたなら、比例に代へるにマルサス氏の使用する『部分』なる言葉を以てして、その章句を訂正し度い、又は若し比例といふ言

葉を残すのなら、それはより肥沃な土地に於いて得られた生産物の比例でなければならぬ。

【第九節 穀物を輸入する國に於ける、地主の利害と國家のそれとの關聯に就いて】（譯者註）

（譯者註 第三版ではこゝで節を改めず以下は同じく第八節の一部分となつてゐる）

地主の利害と國家のそれとの最も嚴密な結合に關して（存在し）【起り】得る唯一の【考へ得べき】疑ひは、輸入の問題にある。そしてこの場合には兎に角地主は他の（生産者）【者】よりもより（嫉まれる）【悪い】地位に置かれ（てゐると考へられ）得ないことは明かである（る）。【り、そして貿易の自由の最も熱心な盟友の或る者によつて、地主は遙かによりよき地位に置かれると正當に述べられてゐる。】（若し或る外國民が機械で我國より優越してゐないならば、我國に於ける）羊毛、絹、【又は】亞麻（又は綿）で製した財貨の（現實の）製造業者の個人的利益が外國の競争によつて害さるべきことは、何人も嘗つて疑つたことはない。そして多數の労働者の輸入が勞賃を引下げる傾向あることを否定する者は、殆んどないであらう。従つて（註）この問題に關し吾々の採り得る最も不利な見解の下に於いても、【輸入に關しての】地主の場合は社會の他の（生産者）【階級】のそれとは分離されてゐないのである。

註 かういふ明かな且つ重要な相違がある。羊毛、絹、又は亞麻で製した財貨の製造業者の個

人的利益は外國の競争によつて害せられ、そして彼等は損失し乍ら彼等の資本を他の事業部門へ移さざるを得なくなるかも知れぬが、併しなほ彼等は、以前に有つてゐたよりも遙かには劣らない資本及び収入を有つであらう。若し極度の自由が穀物の輸入に許されるならば、より劣れる土地の地主の地代は全くなくなつて了ひ、そしてよりよい土地に於ける地主のそれは遙かに低減されるであらう。

地主の利害と製造業者のそれとの間には何等かの類似があると想像する程大きな誤りはあり得ない、蓋し彼等は、粗生生産物の輸入に對する制限及び製造財貨の輸入に對する制限によつて、各別に影響を蒙るからである。彼等の利害は全く異なる基礎に基く。製造業者は、輸入に對する制限が何であらうとも、何等かの期間、彼れの資本に對して一般且つ通常利潤率以上を得ることは、決して出来ず、従つて若し彼が容易に彼れの資本を一つの事業から何等かの他の事業に移すことが出来るならば、制限の撤廢による彼れの損失は小であらう。

併し地主にとつては、それは、地代があるかないかの問題であり——有用な機械を有つか何の役にも立たぬ機械を有つかの問題である。少しでも類似してゐるのは地主と製造業者との位置ではなく、農業者と製造業者との位置である。彼等の場合に於いては實際類似は當てはまる。

【併し、外ならぬアダム・スミスの如き權威者によつて、穀物及び粗生生産物の最も自由な輸入も農業者及び地主を害し得ないと、述べられてゐる（二版註）。そして粗生生産物が嵩張る爲めに、それは必然的に殆んど何れの他の貨物よりも外國の競争から保護されてゐる筈であることは、殆んど

普く認められてゐる。】

一版註 Wealth of Nations, Book IV, ch. ii, p. 189, 6th ed. (譯者註——前掲譯書、中巻、一五四頁)

【<sup>1</sup>アダム・スミスの敘述は疑ひもなく餘りに強硬に過ぎる。他方が嚴密に眞實である。而も尙ほ、地主の個人的利益は、殆んど社會の他の階級の或るものの利益程ではなくとも、輸入によつて害を蒙るであらうことは、認めなければならぬ。起りさうな或る場合に於いて、かくして蒙るべき地代の減少は、國家にとつての比例的利益によつて相殺されないのであらうと考へる、私の理由は、私の『人口原理論』Essay on the Principle of Population. の第五版に於て（一版註、可成りの長さに述べて置いたが、讀者はそれを参照せられ度い。】

一版註 Vol. II, Book III, chap. xii.

【併し私は一つの注意を加へるであらうが、それは、若し正當であるならば、確かに極めて重要なものである。それはすなはち、それが屢々使用される仕方での資本の土地への使用は、實際上、且つ事業が實際に行はれてゐる如くに、個人の利害と國家のそれとが相互に比例しない所の唯一の考慮に値する場合である様に、私には思はれる、といふことである。

【若し土地が、單にそれより得られる利潤だけを考へて賣買される商賣向きの用具であり、そして専ら保有者によつて耕作されるならば、この用具が用ひられ且つ改善されることから得る價值と能力との凡ゆる増大は、資本がより有利に土地に使用されるべきか、又は商業及び製造業に使用されるべきかを決定する計算に當然入るであらう。そしてかゝる資本の使用による國家の利益は、一般に、

雙方の場合に於いて、個人によつて得られる利益に比例するであらう。併し、實際上は、かゝる事態が存在することは稀である。大抵のヨーロッパ諸國の土地の極めて大なる部分は、長子相続權、限嗣相續の慣行、及び土地勢力を維持するの願望によつて、市場の外部に置かれてゐる。そして商業階級及び動産を獲得した他のものによつて購買せられる部分は、一般に、彼等の財産を作り又は増大する手段にするよりは寧ろ、既に獲得された富よりの収入を確保し且つ古い土地保有者の勢力に割込まんが爲めに、購買せられるのである。多數の土地保有者のかゝる習慣及び感情の自然的結果は、國の耕作が主として借地人によつて行はれなければならぬといふことである。そして實際、密に普通の農作手續が主として保有者ならざる人々によつて行はれるのみならず、更に過去三十年の著しい特徴たる農業と耕作の用具及び方法とに於ける大なる永続的改良の極めて大なる部分ですら、同一階級の人々の資本によつて爲されてゐる、といふことが認められてゐる。

【併し若し、土壤に行はれた改良の極めて大なる部分が、借地人の資本、熟練及び勤勞により得られたものであるといふことが、眞實であるならば、——私はそれが眞實であることを確信するが——かゝる個人が、商業及び製造業に使用せられる資本に比較しての、農業に使用せられる資本より得てゐる利益は、國の得る利益に比例してはゐないといふこと、又は換言すれば、資本の使用に於ける個人の利益は、この場合國家の利益と一致してはゐないといふこと程、明かな且つ議論の餘地なき眞理はあり得ないのである。

【この主張は、若し吾々が注意深く、上述の事情の下に於いて、一〇、〇〇〇磅の資本を農業に

又は製造業に使用することの個人及び國家への相對的結果如何を、検討するならば、完全に明かにせられるであらう。

【一〇、〇〇〇磅の資本が、(R註)二十年間、約二十パーセントの利潤で、商業又は製造業に使用せられ、そして資本家はこの期限の終りに彼れの財産を倍加せられて引退するものと、假定しよう。かゝる資本の農業への使用に同一の獎勵を與へる爲めには、同一の又は殆んど同一の利益が個人に提供されなければならないことは、明かである。併し地代を支拂つて借入れた土地にその資本を使用する者をして、彼れの一〇、〇〇〇磅を二十年を経過して後に二〇、〇〇〇磅たらしめるを、得せしめる爲めには、彼が現實に土地に投じ而も期限の終りに引去り得ない所の彼れの資本部分を彼に回収せしめる爲めに、彼が年々より高い利潤を得なければならぬことは明かである。そしてその際、若し彼が本質的改良者であるならば、彼は必然的に、借地期限の終りに、流通の媒介物の價値の變化とは別に、その開始の時よりも極めてより高い地代に價する土地を地主に残さなければならぬ。併し一時的小作地を有つ農業者にとり彼に資本の通常利潤を與へる爲めに必要なかゝるより高き年々の收得は、少くとも一部分は、借地制限の終りに地代の形に於いて繼續せられ、そしてそれだけ國家の利得とならなければならない。】

R註 マルサス氏はこゝでいさゝか自己矛盾をしてゐる。彼は國家に對する利益を貨幣價値で評價して居り、そしてこの場合彼自身の價値尺度を使用すべきであるのにしてゐない。我國が、若し輸入が自由に許されてゐるならば一定の資本で得たと同一の貨幣利潤を、同一の資本を國

内で農業に使用することによつて、得たといふことを、マルサス氏が證明し得たと假定しよう、——これは彼れの證明し得ないことなのだ。私は彼に答へ得よう、『若し輸入が許可され、そして穀物が低廉ならしめられたならば、同一の貨幣資本を以て私は遙かにより多くの労働を使用し得たであらう——私は又同一の貨幣収入でも同一のことが出来たであらう、従つて自由輸入が許されないので、吾々はこの追加労働量を使用し得る總ての貨物を奪はれたのである。』この確固たる得點に對して、マルサス氏は、借地人がその賃借した土地に施しそして永久的に土地に固定されて了つたので再び取り除かれ得ない所の、永久的改良を持出す。これ等の小さな得點の期待が常に地代を約する際に斟酌されないか否か、又それは實際は地主の地代の一部分を構成しないか否かは、疑はれ得よう。私よりも他の者の方が、借地人の借地期限の終了の際に彼等がかくして土地に残した價值に就いて、よりよく判斷することが出来る。私はそれを極めて高く評價する氣にはならない。若し労働を支配する能力が價值の尺度であるならば、價值は必要品の分量に依存しなければならず、そして其の貨幣價值には依存しない。

【商業及び製造業に使用せられた資本の場合には、國家にとつての利潤は個人によつて得られる利潤に比例する。農業に使用せられる資本の場合には國家にとつての利潤は遙かにより大である。そしてこのことは、生産物が貨幣で測定されようと又は穀物及び労働で測定されようと、眞實であらう。何れにしても、屹度現實に起つてゐるであらうと思はれる事情の下に於いては、農業に使用せられてゐる資本より得られる國家にとつての利潤は恐らく十四又は十五パーセントに測定され得

ようが、他方個人にとつての利潤は、雙方の場合に於いて、單に十二パーセントに過ぎないことであらう。

【サア・ジョン・シンクレアは、(R註)彼れの『スコットランドの農耕』 Husbandry of Scotland に於いて、イースト・ロウジアンに於ける一農場の細かい事情を述べてゐるが、そこでは地代は殆んど生産物の半であり、そして地代及び利潤の合計は使用資本に對する五十六パーセントの收得を産み出してゐるのである。併し地代及び利潤の合計は、かく使用せられた資本から國が得る富の眞實尺度である。そして上述の農場は、近年最大の改良が爲されたる組織ある輪作が行はれてゐる農場であるから、この富の増大の大なる部分は、借地契約の更改の前に農場を手に入れてゐた借地人の資本より得られたものであることは、——國家にとつてのかゝる富の増加はかくの如くその資本を使用する個人にとつては利益の誘因として作用し得なかつたであらうけれども——殆んど疑ひがないのである。】

R註 マルサス氏は、穀物の最も自由な輸入は、吾々が今その農場から得てゐる分量の毫末でも、吾々から奪ふであらう、と信ずるのか？ 借地人によりそこに蓄積された資本から得られてゐる大なる地代に就いては、私はこの論題につき懷疑的ならざるを得ない。

【然らば若し(R註)戦争の間に、外國穀物の輸入に對し何等の障害も起らず、その結果として農業の利潤は單に十パーセントに過ぎず、他方商業及び製造業の利潤は十二パーセントであるとすれば、國の資本は云ふ迄もなく商業及び製造業に流れて行つたであらう。そして通例の如く國家の利益を

個人の利益で測るならば、このことは十二對十の比例に於いて資本のより有利な誘導であつたであらう。併し、若しこの問題に關し吾々が今採つた見解が正しいならば、それは、關係個人の利益によつて測つた十パーセントの利潤より十二パーセントの利潤への資本の便宜な誘導ではなくして、國家の利益で測つた十四パーセントの利潤から僅か十二パーセントの利潤への資本の不利な誘導であつたであらう。】

R註 この度も又も評價は貨幣利潤でなされてゐるが、併し私は、雙方の場合に於いて、貨幣利潤を勞働及び諸貨物を支配する能力に還元して貰ひ度い。私は、この二つの場合に於いて如何なる價値を得ることが出来たであらうか、といふことを知らうとは望まない、如何なる富、——社會にとり如何なる幸福の手段を得ることが出来ましたらうか！ といふことが知り度いのだ。

【從つて、戰爭中の外國穀物の輸入に對する自然的（一版註）制限は、強制的に内國の耕作の利潤を引上げることによつて、國の資本を、然らざればそれが流入すべかりし通路よりもより有利な通路に誘導し、そして最初に確かに期待せられた如くに富と人口との増進を害することなく、決定的に且つ本質的にそれを促進したのであらうことは、明かである。】

一版註 一七九八年乃至一八一四年の穀物の高き價格は、戰爭及び作柄によつて惹起されたものであつて穀物條令によつて惹起されたものではなく、そして港を開いてゐる國は戰爭及び平和に於いて價格の極めて大なる變動を蒙るであらうことを、想起するのは、常に極めて重要なことである。

【そして實際上（R註）國內で栽培された穀物に對する需要が、耕作に引入られた新しい土地に

使用せられた資本の利潤がそれが産出す地代と共に全體で商業及び製造業に用ひられる資本の收得よりも使用資本との比例に於いてより大なる收得を成す、が如きものである時には常に、かゝる制限はこの結果を啻に惹起し得るのみならず又惹起さなければならぬ。蓋しこの場合に於いて、かかる制限がなければ、外國穀物は、それが國內に於いて生産せられべき價格よりもより低廉な貨幣價格で購買せられようけれども、それは然かく小なる資本及び勞働の消費では——これが有利な資本使用の眞實の證據である——購買せられないであらうからである。（一版註）。】

R註 若し穀物收得で測定すればこれは眞實であり、そして貨幣收得で測定すればさうではない。唯一の重要な問題は事實、吾々が資本と勞働との最少の支出で吾々の穀物を國內で買ひ得るか外國で買ひ得るか、といふことである。そして吾々は、一定の資本を以て輸入し得る分量と等しい額の資本で栽培し得る分量との比較によつてのみ、これについて判断すべきである。吾々が判断すべきは分量によつてであつて、貨幣價値によつてではない。吾々は何ものでも、それを稀少ならしめることによつて、高い貨幣價値を有たせ得よう。

一版註 若し（R註）輸入に對する制限が必然的に、穀物を獲得するに必要とされる勞働及び資本の分量を増大するならば、それは云ふ迄もなく富及び生産力の爲めに一瞬も擁護せられ得ないであらう。併し若し資本を土地に誘導することによつてそれが永続的改善を惹起すならば、全問題は變更される。農業に於ける永続的改良はより、以上の土地の獲得に類似する。併し乍ら、假令それが何等この種の結果を有たないとしても、それは更により重要な他の理由によつて望ましいであらう。最近の事件は吾々をして、少なからざる驚駭の念を以つて、我國の幸福に關しても又自由に關しても我國の製造業人口の比例が大いに増大したのを、熟考せしめるのである。

R註 制限が攻撃されるのはそれがその分量を増大するからに外ならない。それがこの結果を有することを何人が疑ひ得ようか？ 他の根據に立つてそれが策を得たものであるといふことは別の問題である。これ等の他の根據に立つても制限に賛する議論は、この問題に關する私の見解では、極めて確固たるものではないことを、私は告白する。

【併し若し (R註) 富の増進が、外國穀物の輸入に對するかゝる制限によつて、一定分量の資本及び勞働によつて國內で購買された粗生産物の分量が、同一分量の資本及び勞働によつて外國より購買せられ得べかりし分量よりもより大である爲めに、遅延せられるよりは寧ろ促進せられたならば、人口は遅延せられるよりは寧ろ促進せられなければならなかつたことは全く明かである。そして確かに、戰爭中の過去十年又は十五年の間に起つたことが知られてゐる所の、世紀の平均以上に遙かに出づる人口の異常に急速な増大は、この結論を確證する傾向が極めて大である。】

R註 實際これを認めるならば、結論は從つて生ずる。

【こゝに爲された (R註) 主張は寧ろ驚くべきことに思はれるかも知れない。併し讀者は如何にそれが限られてゐるかを知るであらう。それは、其の一般的结果に就いては、永續的改良の結果に單に一時的利益を有するに過ぎない所の資本によつて爲されてゐるかゝる改良に依存する。そして輸入に對する制限に關しては、それは、かゝる制限は、それが造り出す内國農業の生産物に對する需要の増大によつて、然らざれば起らなかつた改良を惹起すの結果を、有たなければならぬ、といふ事情に依存する。併しこれ等の通常の隨伴物の何れも絶対に必要ではないのである。】

R註 私にはそれは極めて驚くべきことであり、そして私は全く無根據なことであると信ずる。【農業に於ける永續的改良なくしても、多量の資本は土地に使用せられ、そして内國生産物に對する需要の一時的増大が起り得よう。こゝに言はうといふ總ては、かゝる事情の下に於いて、農業に於ける永續的改良が實際に爲され、そして地代が創造される時には、かゝる資本によつて創造される交換價值に於ける國家の利益は (一版註、かゝる程度迄、個人の利益よりも決定的により大である、といふ結論に抗することは不可能である、といふことである。】

一版註 私 (R註) 交換價值及び利潤率に關説するのであつて、便宜品及び奢侈品の量に關説するのではない。機械に於ける殆んど總ての改良に於いては、國家は結局は生産者よりもより多く利益を受けるのであるが、併しそれは利潤率及び交換上の眞實價值に關してはなからず。

R註 若しこれが事實であつても、若し貴君が貴君の命題を立證しすらしても、それは吾々の實踐には何の影響をも有たない筈である。吾々は吾々の財貨の名目的交換價值如何は殆んど氣にとめない (そして私は、其の眞實價值も、と云ひ度い)。吾々が氣にかけてゐるのは豊富な便宜品及び奢侈品を有つことである。然らば貴君が言つた凡ゆる言葉が眞實であるとしても、若し無制限の穀物貿易が、豊富な便宜品及び奢侈品を吾々に與へる所の、高からうと低からうと一つの價值を、吾々に與へる筈であるならば、吾々はそれに賛成する。

併し再び私は問ふ、マルサス氏の交換上の眞實價值の尺度はどうなるのか、と——吾々の告げられた所では、それは一定分量の必需品及び便宜品であり、そして物は、それがこれ等の便宜

品及び必要品の多少と引換へに賣られるに従つて、騰落する——次いで一定分量の必需品及び便宜品は常に一定分量の労働を支配するであらうと想像されたので——労働が價値の尺度として選ばれた。——これはもう一つの訂正を蒙つた。労働は可變的なことが認められたので、それも亦變動すると認められるもう一つの貨物を持出すことが望ましくなつた。併しこれは變動するが他の方向に變動するので従つて一方の變動は他方の變動を訂正し二者の中項が吾々に不變の尺度を與へる——云ふ所によれば——ものであり、従つて交換上の眞實價値の最終的尺度は穀物と労働との中項であることとせられた。

それは今迄屢々關説されては居らず、そして吾々は、現在の議論に於いては、便宜品及び奢侈品ではなく交換價値に關説してゐる、と告げられるから、全く拋棄されて了つてゐる様に見えることを、告白しなければならぬ。吾々は、こゝで交換價値といふのが何のことであるかを知るのに全く當惑する。それは穀物及び労働ではあり得ない、蓋しそれ等は、私が今證示した如くに、便宜品及び奢侈品と正確に同一性質のものと考えられてゐるからである。私は、非難された貨幣價値が意味されてゐるのではないかと、大いに疑ふが、若しさうならば、マルサス氏は、價値と富との間には極めて顯著な區別があるといふことで、私に同意しなければならぬ。價値は生産費に依存し、富は生産物の豊富に依存する。

【この考察は、前に述べた諸考察と相俟つて、外國穀物の輸入に對する制限の場合に於いても、國家の利益は時に地主のそれと同一ではなからうか否か、といふことを、少くとも疑問な事柄ならし

めるであらう。併し他の貨物の輸入に對する制限に關しては、かゝる疑問は何等存在しないであらう。】そして吾々が（若しこれに）、完全なる自由通商の状態に於いては、資本及び人口が増大するのは大いに土地の地代によつて生活する者の利益であるが、他方資本の利潤及び労働の勞賃によつて生活する者にとつては、十分控目に言つても、資本及び人口の増大は遙かにより疑はしい利益である、といふことを附加する（ならば）【時には】、國家に於ける他の如何なる階級の利益も、地主の利益程密接に且つ必然的に、其の富（繁榮）及び力と關聯してゐるものではない、と最も安全に主張せられ得よう。

### （第九節）【第十節】 土地の剩餘生産物に關する概観

社會の進歩に於いて、地代の形に於いて主として地主に歸屬する、土地の剩餘生産物から、社會が得る極めて大なる利益が、未だ十分に理解され且つ認められてゐないとは、寧ろ驚くべきことに思はれる。私はこの剩餘を神の惠深き賜物と呼んだ、そして私は最も決定的に、それは十分にその名に値する、といふ意見である。併しリカード氏は次の如き章句を書いてゐる、——  
『土地は、地代といふ形で剩餘を生むの故を以て、有用なる生産物の他の各種の根源に比し、これに優る長所を有つて居るとは、吾々の最も普通に聞く所である。而かも、土地が最も豊富であり、最も生産的であり、而して最も肥沃であるならば、そは地代を生み出さないものである。而し

て（土地の）より肥沃なる部分の本源的生産物の一部が、地代として分離されるのは、抑も土地の力が衰へ、さうして勞働に對する報酬としてより少ししか生産されない時に於いてのみである。製造業者がそれに依つて援助される所の諸自然力と比較して、（土地の）一缺點なりとして注目せらるべかりし所の、土地のこの性質が、却つて其の特殊なる優越を構成するものとして指摘され來つたとは、奇怪千萬である。若し空氣、水、蒸氣の弾力性、及び大氣の壓力が、各種の等級を有するものであり、これ等の物は占有され得るものであり、而して各等級は單に相當の分量に於いて存在して居るに過ぎない、とするならば、これ等は、土地と同じく、次第に劣質のものが使用されるに至るに従つて、賃料を與へるであらう。より劣質のものが使用される毎に、其の製造にこれ等が用ひられたる所の諸々の貨物の價値は、騰貴するであらう、何故なれば、相等しき勞働量も其の生産力が衰へるであらうから。人は、額に汗して、より多く働くであらう、而して自然は、より少ししか爲さなないであらう。さうして土地は、其の諸々の力が限定されて居るため、最早他に優る點を一つも有たないであらう。』

『若し、土地が地代といふ形で與ふる所の剩餘生産物が一つの利益であるとするならば、年と共に、新らしく造られたる機械が舊いものよりも能率が減じて來るといふことが、望ましいわけである。蓋し、この事は、疑もなく、その機械によつてのみならず、國內に在る他のすべての機械によつて製造されたる財貨に、より大なる交換價値を與へるであらうし、そして、最も生産的なる機械を所有する總ての人々にレントが支拂はるゝであらうから。』(註)

註 *Princ. of Polit. Econ. ch. II. (p. 63, 3rd ed.) [p. 59.]* (譯者註——前掲譯書、七〇—七一頁)

(前節に於いて述べたる所は、この問題のかゝる觀方が如何に甚だしく誤つてゐるものなるかを、明かに證示する。併しその上に又こゝで吾々は述べざるを得ない。【扱て】自然の賜物に(註)關係するに當つて、吾々は確かに、吾々の天性と、吾々が生きてゐる世界との、法則と構造との關係に於いて、其の價値を論じなければならぬ。併し若し何人かが計算を爲すの勞を探るならば、彼は、若し生活の必需品が限りなく獲得せられ(且つ分配せられ)得、そして人口は二十五年毎に倍加され得るならば、クリスト紀元以來一組の夫婦より産出されたであらう人口は、管に一平方碼毎に四人の人間が立つてゐる程に地球を全く充たすのみならず、更に吾々の太陽系の總ての遊星をも充たすに十分であり、そしてそれに止まらず、肉眼で見える星の各々が一太陽であり且つ吾々の太陽が有つてゐると同じだけのそれに屬する遊星を有つてゐると假定して、その周圍に回轉してゐる總ての遊星を充たすに十分であつたであらう。かくの如く述べた時には過度に思はれるであらうが、而も人間の天性と地位とに最も適合してゐると私の確信する所の、この人口法則の下に於いては、食物又は或る他の生活の必需品の生産に對する或る限界が存在しなければならぬことは、全く明かである。人類の天性の構造と地上に於ける人間の地位とが全く一變することなくしては、生活の必需品の全體は、水や空氣や水蒸氣の弾力性や大氣の壓力の如くに豊富には供給せられ得ない。限られたる餘地に於ける食物を生産する無限の便宜程害多き贈物を——人類を恢復し難き窮乏に陥れる傾向ある贈物を、考へることは容易ではない。然らば、恵多き



創造者は、彼れの創造物に彼が課した法則の下に於ける彼等の欲求と必要とを知つて、慈悲深くも、生活の必需品の全體を空氣や水の如く豊富に與へ得なかつたのである。このことが直ちに、前者が量に於いて限られて居り、そして後者が極めて豊富に滔々と與へられる理由を、證示する。併し若し、食物を生産する能力の制限が限られた餘地に押込められてゐる人間に明かに必要であることが認められるならば——これは認めなければならぬことであるが——然らば彼が受取つた土地の現實の分量の價值は、それが支持すべき人々の數に比較して、それを耕すに必要な勞働の分量が小なることに、換言すれば、自然の法則によつて終には地代に歸する所の、かくもリカアドウ氏によつて過小評價せられた特別の剩餘に、依存するものである。

註 私は經濟學に關する論說に於いてそれが考察されなければならぬといふことに同意しない。この賜物はそれがより多いかより少いかに従つて大であり又は小であるのであつて、それが道徳的により有用であらうか又はより有用でないであらうかに従つてさうなのではない。私が友人が一日に飲む葡萄酒を一パイントに制限すれば、彼れの健康にとつてよりよいであらうが、併し若し私が一壘を與へるならば私の贈物は最も價值が多い。問題は、創造者が土地の生産力を制限することによつて吾々の眞實の幸福を顧慮しなかつたか否かといふことではなく、彼がそれをかく制限した——彼は、水や空氣やの無限の供給を吾々に與へ、そして大氣、蒸氣の彈力性、其他自然によつて與へられた多くの力を吾々が用ひる目的に對しては、何の限界をも定めてゐないのに——といふ事實があるかないか、といふことである。

マルサス氏は、私が、自然の法則によつて終には地代に歸する特別の剩餘を、過小評價すると云ふ。この敘述が現れてゐる丁度そのパラグラフの初めに於いては、私に對する攻撃は、私は、土地の産出力が、自然の賜物の中の多くの他のものの如くに無限ではないからとてこれに満足してゐない、といふことであり、そして結論は、私が土地の總ての産出力を過小評價してゐるといふことである。私は、略言すれば、それが、マルサス氏が正當にも剩餘生産物と呼んでゐるものを十分に産出しないことに不満であり、そして同時に私は、それが用ひ得る以上に産出することに不満である、といふのである。

かゝる二つの反對の非難に對しては私は辯解することが出来ない、そして私はその一つにだけは該當するのを認めるから、私は他方に就いては殆んど云はないこととする。然らばこの際、これを最後として、私が、剩餘生産物を産出す土地の力を、吾々が總てを得る源泉である、と評價してゐることを、云はさせて貰ひ度い。この力に比例して、吾々は、勉學及び人生に尊嚴を與へる知識の獲得の爲めの餘暇を享受する。それなくしては、吾々は技術も製造業も所有し得ず、そして吾々の全時間は悲惨な生存を支持する爲めの食物の獲得に充てられることであらう。他國に於ける土地の産出力が、吾々が吾々の最後の供給物を得なければならぬ土地よりもより大であればこそ、私はそれ等の土地に頼らうとし、そして穀物の輸入に賛成するのである、蓋しより少い勞働が食物の獲得に充てられるので、より多くが他の満足物の獲得に使用せられ得ようからである。

他の點に關して云へば、私は、確信を以て、地代は、自然がその贈物に與へた限界とその範圍が無限ではないことによるものである、と繰返して云ふ。若し肥沃度に何等の限界もないならば、若し資本が次々と等しく生産的であつたならば、何等の地代も發生し得なかつたであらう。『併し土地は、かゝる事情の下に於いて生まれ得べき人口を包含し得ないであらう。』——私はこれを否定しない——この敘述は又私が今述べたことを反駁もしない。私の命題は眞實であらうかからうか？ マルサス氏は眞實でない云ふ。では貴君の證據は？ 贈物は災害多き贈物となり、そして人類は恢復し得ない窮乏に陥れられるであらう、と。扱て私はこれが答へであるかと問ふ。若し私が神に反對の語を漏らし、そして自然が鷹揚の足りないのを非難するのなら、マルサス氏は私の不平が無根據であり且つ不合理であることを證示し得たであらう。併し私はこのことを爲したか？ 確かに否、私は唯、若し自然がその贈物を制限しなかつたならば地代はないであらう、と云つたに過ぎない、そしてマルサス氏がこれに答へて述べる所は、社會の進歩につれて地代の形で主として地主に歸屬することとなる土地の剩餘生産物から社會が得るこの極めて大きな利益が、未だ十分に理解され且つ認められてゐないのは、寧ろ驚くべきことと思はれる、といふことである。扱て私はつゝまじやかに、私がそれを誤解したか又はそれを認めなかつたといふことを證示する爲めの、一つの事實、又は一つの議論を、彼は持出してゐない、と主張するのである。

若し製造貨物が (R<sup>馬</sup>)、リカアドウ氏の假定せる機械の等級によつて、地代を産出すとするな

らば、人間は、彼れの云ふが如くに、彼れの額に汗してより多くを爲すであらう (馬)。そして彼が依然同一分量の貨物を獲得すると假定すれば (併し乍ら彼はこれを獲得しないであらうが) 彼の労働の増大はかくして創造されたる地代の大きさに比例するであらう。併し、一定分量の土地が地代の形に於いて産出す剩餘は、これと全く異なる。それは、土地が産出し得る穀物の分量を生産するに全く必要な労働の増大の尺度ではなくして、最終的に、情深き神によつて人間に與へられた食物の生産に於ける労働の輕減の正確な尺度である。若しこの最終的剩餘が小であるならば、社會の大きな部分の労働は、彼等の額に汗して生活の單なる必要品の獲得に絶えず従事しなければならず、そして社會は (便宜品) 【便宜な】奢侈品及び餘暇を手に入れること最も小でなければならぬ。然るに若しこの剩餘が大であるならば、製造品、外國の奢侈品、藝術、文學及び餘暇は豊富であらう。

R註 これを眞實であるが、併し若し貴君が土地の肥沃度を減少しそしてそれによつて地代を増大させるならば、事情はこれと同一ではないのではなからうか？ 彼れの労働の増大はその場合に、かくの如くして創造せられた地代の大きさに比例しないであらうか？ 併し土地の肥沃度を増大することによつて貴君は地代を増大し得よう、そして假定された機械の場合に於いて其の生産力を増大し、そしてそれ等の力の相違を増大することによつて、さうすることを得よう。『地代は、最終的に、情深き神によつて人間に與へられた食物の生産に於ける労働の輕減の正確な尺度である。』マルサス氏は望むならばそれをさう呼んでもよからう、併し眞實の輕

減はより大ではなからうか——若し土地がより肥沃であるならば？ 贈物がより豊富になるにつれ地代は下落しないであらうか？ 併し地代は食物の生産に於ける労働の軽減の正確な尺度であらうか？ 私はそれを否定する。剰餘生産物はさうである、併し地代と剰餘生産物とは同一物を意味しない。アメリカに於ける剰餘生産物は、人口に比例して、當地に於けるよりもより大である。地代は彼處で同じ程高いか？ マルサス氏はさうだとは云はないであらう。アメリカに於ける剰餘生産物は主として利潤及び高い労賃で現れ、そしてそれが地代の形態で現れる場合よりもより多くその形態に於いて一般的繁榮に寄與してゐるのである。

註 換言すれば、等級は、(土地の場合の如くに) その或るものを使用する必要がある所より、悪い機械へと向ふと假定して、であつて、その反對ではない。製造品と必需品とが地代に關して比較され得ない理由は、必需品は、限られた領域に於いては、それが僅かの労働を要しようが又は多くの労働を要しようが、常に同一の交換價值たらんとする傾向があるが、併し製造品は、若し人爲的割占を蒙つてゐないならば、それを生産する便宜につれて(價值に於いて)下落しなければならぬ、といふことである。従つて吾々は價格は與へられてゐるとは假定することは出来ない。併し若し出來るとすれば、生産の便宜は、雙方の場合に於いて、等しく労働の軽減の尺度であらう。

労働の自然價格を、停止の人口を支持するであらう如き價格——かゝる價格は、一般に、可成りの良き政府の下に於いて且つ通常の事態に於いては、數百年の間起り得ないものであるが——であると定義しきへする程着實に、彼れの注意を永續的な且つ最終的結果に一般に据ゑてゐるリカアドウ氏が、常に、地代を取扱ふに當つて、反對の過程を探り、そして殆んど全く一時的結果に關説してゐるのは、稍々奇妙である。

米産國に於いては麥産國に於けるよりも生産物のより大なる分前が地主に歸屬し、そして我國に於ける地代は、若し小麥に代へて馬鈴薯が普通の人々の愛好の植物性食物となるとすれば、騰貴するであらう、と言ふことで、アダム・スミスに(註二)彼が反對したのは、明かにこの種の關説からである。リカアドウ氏は(註三)地代は雙方の場合に於いて終局的にはより高くなるであらう、といふことを、認めざるを得なかつたであらうし、又事實認めてゐるのである(註三)。併し彼は直ぐこの變化は直ちに行はれると假定し、そして土地が耕作を抛棄せられるの一時的結果に關説してゐる。併し乍ら(註三)この假定によつてすら、抛棄せられた總ての土地は、自然的事態に於いて労働の價格を單に停止的な人口の維持に迄低減するにかゝるよりも遙かにより短い時間の後に、再び耕作せられるであらう。従つて、リカアドウ氏が主として彼れの著作を通じて考察してゐる結果たる、永續的な且つ最終的結果の爲めには、彼はアダム・スミスの敘述の眞理を認めるべきであつた。

註一 Wealth of Nations, vol. I, Book I, c. XI, pp. 248—250, 5th edit.

R註一 而もなほ『自然の法則によつて終には地代に歸する所の、かくもリカアドウ氏によつて過小評價せられた特別の剰餘』とは。(譯者註—本節の第(四)パラグラフを参照)これ等の章句は首尾一貫し得ようか？

註二 Princ. of Polit. Econ., ch. XXIV, (p. 398, 3rd edit.) [p. 423.] (譯者註—前掲譯書、三六一頁)

R註二 單に停止の人口を維持する爲めに『自然的事態に於いて』労働の價格を低減するに、極めて僅かな時しかかゝらないであらうか？

併し、事實の點に於いては、屹度、地代の一時的な下落すら起らないであらう。如何なる國民も其の食物の性質を突然變化したことは嘗つてないし又決して變化しないであらう。この過程は、採用さるべき新耕作組織に關しても、又發生せしめらるべき新嗜好に關しても、必然的に極めて遅々たるものでなければならぬ。ヨオロッパの大部分に於いては、恐らく、小麥から米への變化は決して起り得ないであらう。そしてそれが起り得る所では、生産された食物の分量の増大に十分等しい人口の増大の爲めに十分の時を與へる如き灌漑の爲めの大なる準備を必要とするであらう。米が現實に栽培されてゐる諸國に於いては、地代が極めて高いことが知られてゐる。ビュウキヤナン博士は、彼れの價値多きミゾオア(譯者註—甲 東南方の州)旅行記に於いて、ガアツ山脈の下方の灌漑された土地に於いては、政府は收穫の三分の二を取上げるのが習慣である。と言つてゐる(註)。これは、小麥の耕作に當てられてゐる如何なる土地も嘗つて産出し得ない、地代の額である。そして(R註)、小麥の耕作から米の耕作への現實の變化が起つてゐる印度の諸地方及びその他の諸國に於いては、地代は常に最終的に極めて大いに騰貴したのみならず、この變化の進行中にさへ騰貴したことを、私は殆んど疑はないのである。

註 Vol. II, p. 212.

R註 これはすなはち、剩餘生産物が極めて大いに増大し、そして政府がそれを強奪した、といふことである——これは地代の騰貴とは極めて異なる。若し租税が延期されるならば、生産物の價格は下落しないであらうか？ 若し貴君がさうだと云ふならば、租税は常に總ての地代を取

つて了ふのみならず、更に又利潤の一部をも取つて了ひ、それは生産物の價格の騰貴といふ形で消費者によつて償還されるであらう。

馬鈴薯に關して云へば、吾々は、吾々に極めて近い所に、それが人民の大衆の植物性食物となるの結果を學ぶ機會を有つてゐる。アイルランドの人口は、過去百年間に、ヨオロッパに於ける他の如何なる國のそれよりもより速かに増大してゐる。そして其の現實の統治の下に於いては、この事實は、馬鈴薯の使用の採用及び徐々たる擴大によるに非れば、合理的に説明せられ得ない。若し馬鈴薯が無かつたならば、アイルランドの人口は、過去一世紀の間に、四倍(2)よりも遙かに以上)になる代りに二倍よりも(遙かに)以上にはならなかつたであらう、と私は信ずる。この人口の増大は、勞働の比較的貨幣勞賃に於ける大なる下落を惹起したと同時に、土地の耕作が抛棄せられる事を妨げ、又は自然的牧場に大なる價値を與へたのである。この勞賃の下落はそれに比例する利潤の騰貴を伴はず、そしてその結果は地代の大なる騰貴であることは、經驗が吾々に告げてゐる。アイルランドの小麥、燕麥及び家畜は、半分の貨幣價格で支拂はれた勞働によつて耕作され栽培されてゐるのに、英蘭に賣られそして英蘭の貨幣價格を有つてゐる。これは利潤から得られる収入か地代から得られる収入かを大いに増大しなければならぬ事態である。そして實際の情報は、それから最大の利益を得たものは後者であることを、吾々に確證するのである(R註)。

R註 最初にはこの利益は利潤に屬し、後に地代に屬するであらう——さうなる時期は、人口の増大と、その結果たる、産出せられ得る粗生産物に對する、需要とに、依存する。

従つて、勞賃の一時的比率をその最終的比率から極めて決定的に區別しないことは大きな誤謬に導かなければならないけれども、今關說されてゐる食物の變化の一時的結果を、その最終的結果と同一種類であると、すなはち、常に地代を引上げる傾向があると、考へることは、かゝる誤謬に導かないであらう【と私は思ふ】。そして、若し吾々が可成りに正當に、吾々の比較を爲すならば、すなはち、若し吾々が、面積、及び土壤に使用せられた資本の分量、に關して、同様の事情の下にある國を比較するならば——これが明かにそれ等を比較する唯一の正當な方法である——吾々は地代が土地の自然的及び後天的肥沃度に比例すべきことを見出すであらう【と私は確信する】。

若しこの島の (R註) 自然的肥沃度が現在の二倍であり、そして人民が等しく勤勞的であり且つ進取的であるならば、この國は、總ての正しい理論によれば、現在二倍に富み且つ人口多く、そして土地の地代は現在の二倍よりも遙かに多かつたであらう。他方に於いて、若しこの島の土壤が其の現在の肥沃度の單に半を有するに過ぎないならば、私が前の機會に述べた如くに、其の一部分のみが穀物の耕作に當てられ得るに過ぎず、この國の富と人口とは全く取るに足らず、そして地代はその現在額の半に近くはなかつたであらう。併し若し、同様な事情の下に於いては、地代と肥沃度が一致して進むならば、地代は、多額の資本が土地に使用せられてゐる英蘭に於いては、同一の面積に資本が十二分の一も使用せられず、そして人口が極度に乏しい、南アメリカのより肥沃な國に於けるよりも、より高いと言ふのは、地代と肥沃度との自然的關聯に反する不當な議論である。

當な議論である。

R註 何人も、地代と肥沃度との間の、自然な又通常の、併し必然的ではない、關聯を、否定しない。

自然的か後天的かの土地の肥沃度は、資本に對する永續的に高き收得の唯一の源泉であると言はれ得よう。若し (R註) 一國の産業が専ら製造業及び商業であり、そして其の總ての穀物をヨーロッパの市場價格で購買するとするならば、其の資本に對する (國民的) 收得が或る長期に亘つて高いことは絶對にあり得ない。實に多額の資本が極度に稀であり、そして極めて少數の都市に限られてゐる、歴史上の (R註) 比較的早い時期に於いては、特定種類の商業及び製造業に與へられる種類の獨占は、遙かにより長期に亘つて利潤を高く保つ傾向があつた。そして殆んど専ら商業に従事せる或る國家は大なる且つ華々しき結果を疑ひも無く得た。併し近代ヨーロッパに於いては、資本の一般的豊富、異なる諸國民の間の容易なる通商、及び國の内外の競争の法則は、土地に使用せられた資本以外の資本が大なる永續的收得を受取るの可能性を妨げる。近代に於ける (R註) 大商工業國家は、其の熟練がどれ程であらうとも、ヨーロッパの殘部の平均よりも永續的に (遙かに) より高い利潤を得るとは未だ知られてゐない。併し可成りの良い土地に成功的に使用せられてゐる資本は、永續的に且つ妨害又は妨げの懼れなしに、時に二十パーセントを、時に三十又は四十パーセントを、又時に五十又は六十パーセントをさへ、産出するのである。

R註一 かゝる國に於ける利潤率は、總ての國に於ける利潤率と同様に、勞働者の勞賃を與へるに

必要な労働の分量に依存するであらう。若し穀物の価格が、穀物がそれと交換せられる總ての他の物の価格に比較して、低いならば、國がそれ自身の穀物を栽培しようとは又はそれを輸入しようとは、利潤は當然に高いであらう。

土地から直接に得られようとは又は輸入によつて得られようとは、穀物の眞實の低廉、其の低廉なる労働価格は、高い利潤の動力因である。穀物の低廉なくしては、換言すれば、労働の代償たる大なる剰餘生産物なくしては、利潤は高くあり得ない——それがあつても利潤は高くはないかも知れない、蓋し労働者の地位がたまたま、この剰餘生産物の大きな部分を支配する能力を有つ底のものであるかも知れぬ——換言すれば彼は高い賃賃を得るかも知れぬ——から。

R註二 これ等の國家は嚴密な獨占を有たなかつた。市民の間に競争があつた——彼等は相互に他よりも安賣りをし得たであらう、従つて彼等は、彼等の財貨の価格を、其の生産費又は自然價格に低減しなければならなかつた。

R註三 それ等の國に於いては穀物の労働價格が大いに相違してゐなかつたから——又は労働者が或る國に於いては他の國よりもよりよき支拂を受けたから、である。

他に比較しての土地に使用せられた資本の結果の驚くべき例證は、我國に於ける財産税の收得に現れた。土地に使用せられた資本より得られた課税し得る（國民）所得は、財産税に殆んど六百五十萬磅を産出す程であつたが、他方商業及び製造業に使用せられた（殆んど等しい）資本より得られた所得は、二百萬磅を産出す程でしかなかつた（註二）。取引及び製造業に使用せられた

資本より得られた所得のより大なる比例は、部分的にはその細分割により、又部分的には他の原因により、課税を免れたといふのは、恐らく眞實であらう。併しかくして惹起された不足は決して農業に使用せられた資本の異常なる生産性を償ひ得なかつたであらう（註三）。そして實に（R註、その一方は其の穀物を栽培すべき土地を有ち、そして他方はそれを購せざるを得ない所の、同一の資本及び同一の利潤率を有つ二つの國を比較する時には、かゝる土地を有つ國は、特に若しそれが肥沃であるならば、遙かにより富み、より人口稠密であり、そして課税の爲めに處分し得るより大なる所得を有たなければならぬことは、全く明かである。

註一 D表は凡ゆる種類の自由職業を含んでゐた。金額は三百萬磅に上り、其内自由職業は百萬磅以上と考へられた。

註二 土地上の國民的利潤（又はそこで使用せられた資本によつて得られた、國民にとつての、價値の増加）は、普通の農業利潤と共に地代をも含むものと考へられなければならぬことを、常に想起しなければならぬ。

R註 若し穀物が低い價格で英蘭に輸入せられ得るならば、利潤は極めて高いであらう、と吾々は云ふ。現在の地代及び總ての地代は嘗つては利潤を構成したのであり、従つてそれからの控除でなければならぬ。マルサス氏は答へる、若し利潤が同一であつたならば、そして貴君が穀物を輸入したならば、貴君は明かに貴君の總ての地代があつてもより貧しかつたであらう、と。その通り、若し利潤が同一であつたならば！ 併しそれが正に論點なのだ。

肥沃な土壤に屬するもう一つの最も望ましき利益の一つは、かゝる土壤が賦與されてゐる國家は、人類の凡ゆる人の總ての叫びの中で最も悲慘な且つ陰慘な叫びに、——親方製造業者及び商

人の、彼等をして輸出品に對する市場を見出さしめ得べき、低き勞賃を求める叫びに、多くの注意を拂ふを餘儀なくはされない、といふことである。若し一國が（R註二）單に低き勞賃を求める競争に勝つだけで富み得るならば、私は直ちに言ひたい、かゝる富は減ぼせ！と。併し、其の食物の主たる部分を外國人から購買する國民は、この困難な方策を探るべく運命づけられてゐるけれども、肥沃な土地の所有者はさうではない。一國の特有な生産物（及び製造品）は、恐らく決してその國をして、其の便宜品及び奢侈品と並んで其の食物の大なる比例を輸入し得せしめるに足りないけれども（一版註、一般に、國內及び國外の其の總ての商業取引に十分な元氣と精力とを與へるに足るであらう。然るに生産物の小なる犠牲、すなはち（農業上の改良なくして）耕作を餘りにも押進め過ぎないことは、貧民の間に於ける慎慮的習慣（R註三）と共に（註、それをして大なる人口の全部を富と豊饒との間に維持し得せしめるであらう。主として製造業及び商業に依存する一國の勞働階級の間）に於ける（大なる範圍に迄行はれたる結婚に關しての）慎慮的習慣は、それを（害する）【減ぼす】であらう。肥沃な土地を有する國に於いては、かゝる習慣は總ての考へ得る祝福の中の最大のものであらう。

R註一 私も亦さう云ひ度い。吾々は、勞働者が豊かな資料を得ることを、望み、そしてそれを實現する途は、彼が消費する主たる貨物の勞働價格を低廉ならしめることである、と主張する。マルサス氏は、其の食物の主たる部分を外國人から購買する國民は、苛酷にもその代りに其の勞働階級に最低勞賃を與へざるを得ない、と云ふ。これは問題の論點を避けることである。吾

吾は答へる、これは、其の食物をそれが買入るといふことに依存しなければならぬのではなく、それを購買する條件に依存しなければならぬのである——如何なる國民も、若し彼等が自國に於いてより、低廉に買ひ得るならば、外國で買ふことはないであらう。

一版註 綿製品は絹製品以上に我國の特有な生産物ではない。そして若し我國の綿貿易の繁榮が我國の人民の或る大なる数の食物を購買するに必要になるならば、吾々が嘗て経験したよりもより、大なる苦難が吾々を見舞ふであらうことを私は怖れる！

R註二 これは全く新學說である——私は他の機會を得てそれが眞實な學說であるか否かを検討しよう。

註【資本】（農業上の）熟練等に關しては同様な事情の下に於いては、若し慎慮的習慣の普及によつて勞働者の受ける支拂が（極めて）良いならば、同一程度に瘠せた土地は耕作され得ないであらうことは、明かである。併しかゝる土地の（R註）耕作より生ずる生産物及び人口の小なる増大を差控へることは、大きな且つ肥沃な領域に於いては、輕微な且つ此細の犠牲であらうが、他方それから人口の大衆に結果する幸福は、如何なる價格も及ばぬことであらう。

R註 如何なる人民も、若し彼等が其の慎慮的習慣を十分に行ひ、そして其の人口を、彼等が容易に彼等の爲めに作り得る食物に迄制限し得るならば、如何なる領域に於いても殆んど幸福であり得よう。

土地をして大なる地代を産出し得せしめる所の土地の性質に屬する測り得ざる利益の中で、社會の進歩に於いて、それが人間に、彼れの殆んど全部の時を、又は殆んど全社會の時を、單なる必要品の獲得に使用せしめないこと、主たる保證を與へるといふことは、その最小なるものの一

つではない。リカードウ氏〔1〕によれば〔註〕、各個別資本が社會の進歩に於いて不斷に減少し行く収入を産出のみならず、更に〔2〕は、蓄積の進行に於いて利潤より得られる収入の全額は減少せられるであらう〔三版註〕（と考へてゐる様に思はれる）。そして〔ありさうな〕ことと私が恐れるのは、労働者が、彼れの勞賃の中必需品に費されなければならぬ部分を獲得する爲めに、より大なる分量の勞働を使用せざるを得ないであらうといふこと〔である〕。【〔1〕は、疑ひがない】。従つて社會のこれ等の大階級の雙方は、餘暇を得、又は社會の必要な欲求を處理する者から區別された其の享樂〔及び知識的進歩〕を處理する者の勞働を支配する、能力を減少するものと、期待され得よう。併し人類にとつて幸福なことには、土地の純地代は、私有財産制度の下に於いては耕作の増進によつては決して減少され得ない。それが全生産物に對し如何なる比例をとらうとも、現實の額は常に増大し続けなければならず、そして全大衆を醇化し且つ鼓舞するに足る社會の享樂と餘暇との爲めの財本〔フナド〕を常に與へるであらう。

註 私からの引用は正當ではない——私は、若し増大しつゝある人口——資本の蓄積の結果たる——を養ふ爲めに、より悪い土地に頼らざるを得ないならば、これは事實であらう、と云つた。併し私は、若し外國から低廉な食物を得る能力と意思とがあるならば、これは事實でないであらう、と加へた。私の計畫によれば、利潤からも勞賃からも地代への移轉はないであらう。輸入を禁止すればそれがあらうが、他方現實の生産は、より少いであらう。『穀物の栽培がその輸入に優る利益を見よ』とマルサス氏は云ふ。『資本の増進と共に利潤及び勞賃は下落するであら

うが、若し貴君が貴君自身の穀物を栽培するならば、貴君はこの損失を償ふべき地代を得るであらう。』私は、貴君自身の穀物の栽培を拒否すれば、利潤は下落せず、そして貴君は、貴君が蒙りもしない損失に對する不適當な償ひを求めるところはないであらう、と答へる。貴君が穀物を輸入しようと栽培しようと利潤は下落するといふことを證示せんが爲めに私を引き合ひに出すのは、殆んど正當ではなかつた。

三版註 Prince of Polit. Econ. chap. vi. p. 123, 3rd edit.

この意見の眞實なるか否かは、一國の資本が或る比例で増大した際に、利潤はより大なる比例で減少するか否か、といふ問題に依存する。若し蓄積が、リカードウ氏の設例に於いて推定されてゐる比率——これは勿論勝手にとつたものであるが——の如くに、極めて大なる範圍に迄押し進められるならば、恐らくこのことは事實であらう。併し乍ら單に例證の目的の爲めには、一つの極めて大きな社會階級が資本の利潤で生活するにつれ、蓄積は、資本から得られる一般所得が現實に減少するに先立つて、貯蓄の能力又は誘因の不足によつて止つて了ふであらう、と考へ度い。

若し地代を産出す土地を吾々が獲得し得る唯一の條件が、その土地がその最初の所有者の直接の後裔の手に残つてゐるといふことであるならば、假令この贈物より得らるべき利益は疑ひもなく極めて著しく減少されるであらうとも、而もそれが社會に對する一般的且つ不可避的結果あるにより、それを殆んど全く價値なしとして拒否することは最も不賢明なことであらう。併し幸福にもこの利益は土地に附屬してゐるのであり、或る特定保有者に附屬してゐるのではない。地代は過去の力と〔才能〕【〔1〕智慧】との報酬たると同様に、現在の勇氣と知識との報酬である。日に日に土地は勤勞と才能との果實を以て購買されてゐる〔註〕。それは、凡ゆる種類の賞讃すべき努力



に、大なる賞與を、『威嚴ある安易』を、與へる。そして社會の進歩に於いて、資本及び人口の増大及び農業に於ける改良によつてそれがより、價值多くなる故に、それが産出す利益は遙かにより大なる數の人々の間に分かれたるであらう、と信ずる凡ゆる理由があるのである。

註 リカアドウ氏は私が述べてゐることの一事例である。彼は「今」彼の才能と勤勞によつて、大なる土地保有者となつた<sup>2</sup>。「てゐる」。そして彼ほどに尊敬すべき且つ優秀な人は、その頭腦及び心情の性質の爲めに彼程全くその得た所に値し、又はそれをより、良く使用した<sup>2</sup>。「する」人は、私は土地保有者の全體の中から指摘し得ないであらう。

地代の大きな受領者たるリカアドウ氏がその國民的重要性をかくも過小評價し、そしてそれを少しも受取つた事がなく又受取らうと期待しない私が、その重要性を過大評價してゐると恐らく非難せられるであらうのは、稍々奇妙である。(かかる事情の下に於ける吾々の異なる意見)「吾々の異なる地位と意見と」は少くとも吾々の相互の誠實を證示するに役立つべく、そして吾々の精神が吾々が樹立した學說に於いて如何なる偏向に陥つてゐようとも、それは、それに陥らない様に警戒するのが恐らく最も困難なものたる、地位と利益との頑固な偏向ではなかつた事の、有力な推定證據を與へるであらう。

然らば (R註) この問題が考察され得る凡ゆる觀點に於いて、吾々の存在の法則により、終には地代に歸しなければならぬ土地の性質は、人類の幸福に最も重要な恩恵であると思はれる。そして私は、其の價值は、尙ほ其の性質及び其の社會に及ぼす影響に關して或る誤解に惱んでゐる者によつてのみ過小評價され得るに過ぎない、と信ずるのである。

R註 利潤及び地代がそこから得られる土地からの剩餘生産物がある。私は、社會の利益は、穀物の自由輸入を許すことによつて最も促進せられる、といふ意見であるが、このことの結果は、國內に於いて耕作せられてゐる土地から得られる剩餘生産物は、比例に於いては、農業者及び

資本家により、有利に、そして地主にはより、不利に、分たれる、といふことである。マルサス氏は私と意見を異にしてゐる様に思はれるが、併し彼は、資本家より奪つて地主に與へることによつて社會は利益を受ける、といふことを證示せずに、地代を以て明かな利得であると考へ、そして、私が剩餘生産物は地代の騰落につれて増減すると認めようとしなからといつて、私が其の價值を過小評價してゐると非難してゐるのである。

12308

昭和十二年五月十五日 第一刷發行  
昭和二十三年五月五日 第四刷發行

經濟學原理 上卷

定價 八拾圓

著者 吉田秀夫

編輯者 東京都千代田區神田一ツ橋 岩波書店內  
布川角左衛門

發行者 東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地  
岩波雄二郎

印刷者 東京都新宿區市谷加賀町一丁目十二番地  
小坂孟



發行所 東京都千代田區  
神田一ツ橋二ノ三  
岩波書店  
會員番號A一〇九〇〇四號

大日本印刷・永井製本

讀書子に寄す

岩波茂雄

—岩波文庫發刊に際して—

眞理は萬人によつて求められることを自ら欲し、藝術は萬人によつて愛されることを自ら望む。實ては民を愚昧ならしめるために學藝が最も狭き堂宇に閉鎖されたことがあつた。今や知識と美とを特權階級の獨占より奪ひ返すことはつねに進取的なる民衆の切實なる要求である。岩波文庫は此要求に應じそれに屬せられて生まれた。それは生命ある不朽の書を少數者の書齋と研究室とより解放して街頭に開く立大しめ民衆に任せしめるであらう。近時大量生産豫約出版の流行を見る。その廣告宣傳の狂態は姑く措くも後代に貽す可き禍を懸念する全集が其編輯に萬全の用意をなしたるか。千古の典籍の翻譯企圖に敬虔の態度を缺かざりしか。更に分賣を許さず讀者を繋縛して數十冊を強ふるが如き、果して其揚言する學藝解放の所以なりや。吾人は天下の名士の聲に和して之を推擧するに躊躇するものである。この秋にあつて岩波書店は自己の實務の態度大なるを思ひ、從來の方針の徹底を期するため既に十數年以前より志して來た計畫を慎重審議この際斷然實行することにした。吾人は範をかのレクラム文庫にとり、古今東西に亘つて文藝哲學社會科學自然科學等諸類の如何を問はず、苟も萬人の必讀すべき眞に古典的價値ある書を極めて簡單なる形式に於て逐次刊行し、あらゆる人間に須要なる生活向上の資料、生活批判の原動力を備へんと欲する。この文庫は豫約出版の方法を採らるが故に、讀者は自己の欲する時に自己の欲する書物を各冊に自由に選擇することが出来る。携帶に便にして價格の低きを最主とするが故に、外觀を顧みざるも内容に至つては嚴選最も力を盡し從來の岩波出版物の特色を益々發揮せしめようとする。この計畫たるや世間の一時の投機的なるものと異り、永遠の事業として吾人は微力を傾倒しあらゆる犠牲を忍んで今後永久に繼續發展せしめ、もつて文庫の使命を遺憾なく果さしめることを期する。藝術を愛し知識を求むる士の自ら進んで此舉に参加し、希望と忠告とを寄せられることは吾人の熱望するところである。その性質上經濟的には最も困難多き此事業に敢て當らんとする吾人の志を諒として其達成のため世の讀書子とのうらはしき共同を期待する。

昭和二年七月

終

